HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活［全文の要約］
Author(s)	Kozhevnikova, Daria
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16485号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95104
Type	doctoral thesis
File Information	Daria_Kozhevnikova_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　コジェブニコワ・ダリア

学位論文題名
第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活

本論文は、前半で戦後の南サハリンの形成過程と背景を論じ、後半で、「混在」生活について論じる、2 部構成のような体裁となっている。

第一章では、南サハリンをめぐるソ連の歴史認識の変遷と、ソ連政府側の南サハリンの位置づけについて論じる。20 世紀初頭に流刑地や苦難の象徴として認識されていたサハリンは、日露戦争によりロシア帝国の失敗と結びつけられたが、その一方で、戦争の影響を直接受けた極東の住民は、南サハリンの地政学的な重要性を強く意識していた。スターリン時代に入ると、南サハリンを取り返すことが歴史的な正義となったが、安全保障や経済的利益という意味でも重要な地域であった。こうした背景から、ソ連の統治領として編入された南サハリンにおけるソ連の政策は、ソ連軍政下のほかの占領地ではみられない特殊性を有するものになったと指摘した。

第二章では、南サハリンのソビエト化の特徴について論じる。ソビエト化は、ある地域におけるソビエト秩序の導入、確立、発展の一貫したプロセスであり、政治的、経済的、社会的、精神的な生活の全領域に影響を及ぼすものである。ソ連は生活インフラの整備や経済再建を進め、住民の生活を向上させる一方で、迅速な地域復興とソビエト化を目指した。それは領土の発展と国家間紛争の回避とを目的とした戦略的なアプローチであったが、「混在」生活の重要な背景をなすものであったと言う。また、同じくソ連に編入されたカリーニングラード州との比較を通して、南サハリンでは日本人住民への否定的なイメージが弱く、ソ連人移住者との関係にプラスに働いた可能性を指摘した。

第三章では、戦後の南サハリンへのソ連人移住政策について論じる。初期には農業や漁業従事者が送られたが、急激な人口増加にもかかわらず人材不足が続き、囚人や「特別入植者」を強制的に送り、北朝鮮からの労働者受け入れも行った。一般のソ連人移住者の多くは大戦による被害で行き場を失った人たちで、労働能力や適性の考慮なしに送られた。南サハリンへの移住政策は、労働力確保の面で課題を残した。以上のように、移住民の構成、移住民の移住前の状況、移住政策のプロセスとメカニズムについて詳細に論じ、その政策の結果として、残留日本人への依存度が高くならざるを得なかったことを指摘した。

第四章では、生活空間という観点から、南サハリンがソビエト領土として発展していく過程における課題とその影響について論じる。南サハリンのソ連編入後の最初の軍政期は、無分別な破壊や略奪が横行した「混乱期」とされる。対策は講じられたものの、混乱は民政期にまで続き、地元住民や移住者の生活に大きな影響を与えた。その背景に食料品と物資の不足があり、住民の生活は困窮を極めた。特に移住民や農場労働者の生活状況は悪化し、生活必需品の欠如や不衛生な環境が問題となった。住宅不足も深刻で、移住者は日本人との同居、または日本人が引き上げた後の家屋やバラックに住むことを余儀なくされた。以上のように、劣悪な状況のためにソ連人移住者の多くが本土に戻るなか、労働力や人材不足を補うべく日本人が残留させられたことが、ソ連人と日本人の間の相互関係が結ばれる具体的かつ直接的な背景となったことを指摘した。

第五章では、日本人住民とソ連人住民との関係について論じる。南サハリンにおけるソ連人移住民と日本人住民との関係は、戦後の混乱期に非常に厳しいものとなり、両者にとって大きな試練であった。異なる文化をもつ彼らは、経済的困難や社会的緊張のなかでの「混在」を余儀なくされ、最初の接触においては驚きと戸惑いが伴った。食料・物資不足に悩む両者は協力して問題を乗り越えなければならず、そういう状況下で、物資の交換・共有、生活環境の改善のための共同作業といった、相互依存の関係が生まれ、相互理解も深まっていった。こうした記述に基づき、戦後の南サハリンという、厳しくかつ特殊な環境のもとで共に生活することを強いられたソ連移住者と残留日

本人は、単なる「混在」を超えて協力関係へと発展し、地域社会の形成に寄与することになったと指摘した。

第六章と第七章では、戦後の南サハリンの朝鮮人と彼らの生活について論じる。戦後の南サハリンの朝鮮人の４つのグループについて、その歴史をそれぞれ検討し、朝鮮人社会の形成過程とグループ間の相互関係、および当地における朝鮮人の存在の重要性を明らかにした。特に、ソビエト化のために送り込まれたソ連系朝鮮人は、翻訳者、朝鮮学校の教師、多数の朝鮮人を雇用する大企業の顧問として働き、日本領時代からの住民である先住系朝鮮人向けの政治活動を担当する存在だったと言う。

先住系朝鮮人の生活は以前にも増して厳しくなっていた。食料・物資不足だけでなく、ソビエト化によって始まったソ連式の労働法・警察法、および新しい環境、文化、言語などは朝鮮人社会が経験しなければならない試練であった。そういう強いられた条件のもとで、朝鮮人は短期間でソ連社会の文化や仕組みを理解したばかりでなく、ソ連人が当地の生活に慣れるのを助ける存在にもなったと指摘した。また、ソビエト化が進んだ南サハリンの朝鮮人住民にとって、ソ連人労働者と「対等な立場」にあるという正の側面と、ソ連式の社会システムを強制される負の経験とが背中合わせであったことも明らかとなった。